

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

《 NGU教養スタンダード科目 》

■キリスト教概説 春学期 月曜2限

建学の精神として本学の教育を基礎づけるキリスト教の精神を学ぶ。すなわち、聖書の示す人間観、世界観を学び、「人間とは何か」そして「人間がこの世界にあっていかに真実の生を生きるのか」という問題について考察する。とりわけ、それをもっとも明確な形で示したイエス・キリストの言葉と行為に触れ、限界をもった人間が、人として常に新しく生かされる可能性を与えられていることを知り、それが希望と力に満ちた生を生み出すことを理解する。

■キリスト教教学 秋学期 月曜2限

〈キリスト教平和学〉

キリスト教の視点から「平和」をめぐる諸問題について分析し、平和構築にむけて私たちの出来る事を探るのが私のキリスト教教学のテーマである。

キリスト教をはじめとした宗教がどのように戦争に関わってきたのか。そして、紛争の解決や紛争後の和解のプロセスについて何をしてきたのか。今後どのような貢献が可能なのか。こういったことを批判的に検討する。学生諸君には、この過程で自分が平和構築のために何ができるのかを考えていただきたい。

キリスト教を基礎にした平和理論・紛争処理の研究はほとんど未開拓なのが現状である。そういう意味で、この授業は学問のフロンティア領域と言える。

〈キーワード〉

聖書における戦争、十字軍、正戦論、キリスト教平和運動、キリスト教現実主義、非暴力、市民的不服従、和解のプロセス、など。

■哲学 春学期 木曜2限

主に初めて哲学を学ぶひとのために哲学の諸問題と基礎知識を説明します。具体的には、「哲学とは何か」、「形而上学とは何か」、「個と普遍の問題」、「科学とは何か」という4つのテーマにそって、それぞれ代表的な哲学者の意見の紹介を交えながら説明します。

私たちは日々、様々なものを見聞きし、それについて考え、判断し、その結果に基づいて行動しているわけですが、特に重大な決断の場合は別として、「そうしている」という意識もなしに「そうしている」と思います。私たちの日常は、ほぼ完全にパターン化されており、そうであるからこそ生きてゆけるのでしょう。さて、普通私たちはその「パターン」について考えることはないのですから、それに含まれることについて問われるならば、「当然だ」、「何を馬鹿なことを問うのだ」としか答えようがありません。

哲学を学ぶにあたって、まず最初にすべきことは、そのように「当然だ」と思っていること、あるいは当然すぎて考えもしないことが、必ずしもそうではないということを知ることでしょう。多くの場合、時代や地域性に制約された「先入見」にすぎないのです。そのような私たちの思考の枠組み自体を問いなおし、多様な考え方がありうることを理解していただきたいと思います。

■哲学史 秋学期 木曜2限

哲学を学ぶこととは単に「哲学史の知識を知る」ことではないのですが、「哲学する」ことを学ぶには、哲学史上の知識は必要です。この授業では、中世以降の西洋哲学史の流れに即し、各時代の主要な哲学者、著作、そこでの主な問題、使われている諸概念等をできるだけ整理して紹介します。とりわけ、各時代に特徴的な問題については、現代的に問い直して紹介したいと思います。そこでの主要な問題は「宗教的なものの見方」と「科学的なもの見方」です。それぞれ、私たちの世界の見方、人間の捉え方の一つです。その考察を通じて、自分で考える訓練をおこない、ひいては考え方そのものの多様性を理解していただきたいと思います。

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

■心理学概論 春学期 月曜3限

人に限らず、生き物には意識があります。この意識というものはなかなか形になって見えてきません。その意識を何とかして目に見える形にしようとしているものが心理学です。

最近では、凶悪犯罪の増加や低年齢化がテレビや新聞などで騒がれています。その原因を探る上で、心理学がしばしば登場してきます。犯罪と人の心の関係を探ることで動機を知ることや、今後の防犯活動に役立てようとしているのでしょう。また癒しブームに見られるように、心の安らぎも心理学の研究対象として必要なものになってきました。カウンセリングも徐々に社会に浸透し、学校や企業の中でも専門部署を配置するようになって来ました。現代社会では、心理学というものが「心」「意識」への問題を通じて関心をもたれるようになってきたのです。ただ先にも書きましたが、「心」「意識」というものを、手の平ですくいあげることはできません。そのため心理学では様々な手法を用いて「意識とはなんなのか」「心とはなんなのか」を客観的に見つめていこうとしています。

上に述べた犯罪や心の癒しとの関わりだけでなく、心理学では意識を色々な角度から探ってきました。目に見えないものを扱いながら、その方法は科学的な見地に基づいたものです。主観的な見解を排除し客観的に意識というものを考えていくために物理学的な方法を用いて研究が進められています。

この講義では、これまで心理学で研究されてきた様々な成果を、出来る限り身近な事例を用い解説していく予定です。

キーワードとして、知覚、認知、記憶、学習、社会、環境、発達、臨床、犯罪などを対象とした講義を予定しています。

■日本思想史 春学期 月曜3限

日本の思想—その本質、および伝統と欧化—

この講義は二部構成とする。第一部（春学期）は日本の伝統の中核、日本人の精神の本質にあるものはなにかについて考察する。まず最初に日本的とか日本人好みと言われる場合のイメージについて考えてみよう。次に丸山真男の日本ファシズム・軍国主義論を取り上げ、丸山が日本人の精神性についてどう考えていたかを見てみる。つづいて、日本の代表的な文学作品や国体思想および武士道について検討する。あわせて、もともと外来思想であるが、日本の伝統の一部になった儒教や仏教についても考えてみよう。最後に、日本の地理・環境・風土と民族の成り立ちの特質を検討し、津田左右吉の日本思想史研究を手がかりとしながら、日本的で普遍的な原理を構想することが可能かどうか述べて見ようと思う。

第二部（秋学期）は明治維新前後における日本近代思想の形成について考察する。まず、幕末維新期における対外意識の形成とその問題を取り上げる。この期の日本の対外意識には国際関係における規範という観念がある程度成立するものの、それがとくに東アジアに対しては長続きせず、力の論理に傾斜してゆくが、それはなぜなのか論ずる。次に福沢・加藤らの明治啓蒙思想を取り上げ、啓蒙とはなにか、そして彼らの天賦人權論・自然観・人間観・政治観などを従来の儒教的なそれとの差異と連続性という観点から考察する。また、福沢の文明論を紹介し、西洋文明の光と影、国家と普遍的文明のはざままで彼がどのように苦悩し、選択をなしたか考えてみる。続いて、自由民権運動を考察する。植木・中江・馬場らのこの思想集団は明治啓蒙の天賦人權論を継承しつつ、自由権利のさらなる拡大をめざしたものであるが、その意義と問題について論ずる。一方、功利主義の立場から自由権利の問題を考えようとした小野梓の思想の意味についても取り上げる。維新の改革もようやく一段落した明治二十年代になると、徳富の平民主義、陸の国民主義、志賀や三宅らの国粹主義が出現してくる。これらは啓蒙や民権の思想が抽象的・概念的性格を持つのに対し、より生産や生活、風土や歴史を重視するという特徴があるが、こういう思想の意味について考えながら、幕末維新期の思想を全体として振り返っておく。

第一部（春学期）、第二部（秋学期）いずれを履修しても単位を認定する。「講義・テーマ」はとりあえず第一部の15回分を示す。

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

■日本史 春学期 木曜 2限

この講義では中学・高校の「日本史」のように、あらゆる分野を古い時代から概観するのではなく、男女・夫婦・家族の社会的役割という観点にしぼって日本の歴史を眺めることにします。日本的な男女のあり方は、男性が上位に立ち、女性はそれを支えるというもののように思われがちですが、その男女のあり方は実は、かなり後の時代に政治的につくられたものなのです。戦国時代までの日本の男女のあり方は、もっと別なものです。これから私たちが生きていく社会には、どのような男女や家族のあり方が望ましいのかを考えるため、固定観念にとらわれることのないように、まず歴史をふりかえってみましょう。

■日本文学 春学期 木曜 1限

中世から近世にかけて作られた、御伽草子や説話集等を読んでいきたいと思います。例えば、あなた方が知っている「一寸法師」の原話はどんなものだったのか考えたことがありますか。一寸法師が都に出かけた理由はいったい何だったと思いますか。また、説話は、『今昔物語集』を中心として、面白い話を選んで読んでいきます。それらの話を通して、中世とはどんな時代であったのか、また、その中で人々はどのようなことを考え、生きていたのか等を考えていきたいと思います。

■日本文学史 秋学期 木曜 1限

治承から元暦にかけて戦われた源平合戦の前哨戦ともなった保元物語を扱う。皇位継承に絡んだ戦いであったが、親子・兄弟があい分かれて戦うこととなる。皇室内では、実の兄弟の崇徳院と後白河天皇が、藤原摂関家の内では、藤原忠実・頼長父子が、長男の忠通と対立し、平家は清盛と叔父忠正が、源氏は源義朝と、その父為義と残りの兄弟が対立するというように、誠に不思議な戦いでもあった。前半は、源為朝の奮戦ぶりが中心となろう。当時の武士、合戦の仕方、武器等多方面にわたり講義することとなろう。軍記物語は、また女・子供の文学でもあった。物語の後半で、崇徳院方についた為義は、後白河天皇方についた嫡男義朝の手により斬首される。さらに義朝は、後白河天皇の命令により、幼い四人の弟達を殺すこととなる。それらの死を、為義や四人の子供たちはどのように迎えようとしたのか。さらに彼等の死を聞いた妻であり母である為義の北の方はどうしたのか。具体的に読み進めていきたい。

■国際政治学 春学期 月曜 3限

現在、国際社会で起こっている様々なできごとを理解するためには、その理解を助けるための基本的な知識と考え方が必要になります。その基本的な知識と考え方を養うための講座のひとつが、国際政治学です。

本講座では、国際社会における様々な事象を、政治、経済、社会、法、時には心理的分析し、国際社会の構造と動きについて学ぶことを目的とします。国家のみならず、国家以外の活動主体も研究対象になります。つまり、国家を超える国際的機関や、国境を超えて活動する企業や団体、個人も対象となります。現在の国際社会の構造の理解と現状に見られる諸問題の分析を行うにあたり、日本に住む皆さんの生活がどのように国際社会の諸問題と関係しているのかについても一緒に考えていきたいと思います。本講座では、国際政治学の基本観念と原理を学んでから、戦後国際社会の構造とその変化についてを追っていききたいと思います。

■国際関係論入門 秋学期 月曜 3限

現在、国際社会で起こっている様々なできごとを理解するためには、その理解を助けるための基本的な知識と考え方が必要になります。その基本的な知識と考え方を養うための講座のひとつが、国際関係論です。

本講座では、日本に住む皆さんの生活がどのように国際社会の諸問題と関係しているのかについてをアジアとの関係において考えていききたいと思います。よって、本講座では、国際関係論のな

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

かでも特に第三世界（主にアジア、アフリカ、南米をさす）の社会構造に注目する第三世界論を中心に、その理論および実際の国々の現状をアジアを中心に分析して、日本との関係を考えていきたいと思います。

■現代社会と法律 春学期 木曜1限

「憲法とは何か」と皆さんが誰かに質問された時、もしかすると、こういう回答をするかもしれません。「憲法は法律の一つで国民が守らなければならないルール」と。しかし、これは間違いです。憲法は法律でもなければ、国民が守らなければならないルールでもありません。それでは、「法律とは？」と質問されたら。

続けて、「じゃあ、条例とは？」と質問されたら。何かのルールとはわかるものの、内容を正確に答えたり、他の法との関係を答えるのはなかなか難しいかもしれません。そこで、本講義は、法の存在意義を検討することはもちろんのこと、日本の法にはどのようなものが存在するのか、そして、われわれのよく知る「法律」との関係はどのようなものなのかを理解してもらうことを目的としたいと思います。

言葉だけみると、難しく感じるかもしれませんが、単なる概念説明に終わるのではなく、様々な事例を中心に講義を進めていきたいと思っています。そして、皆さんが実際に何かの法的問題にぶつかった時に、深く詳細にその事例を分析できるようになるための前提知識を提供したいと思っています。

■日本国憲法 秋学期 木曜1限

憲法は、民法や刑法に比べて、身近な存在ではないと感じている学生も多いのではないのでしょうか。しかし、本当に身近ではないのでしょうか。例えば、「お前は国政について意見するな。したら逮捕するぞ。」と警察官に言われたらどうでしょう。また、「お前の親は農民だから子どものお前も農民以外の職は認めない。違う職に就いたら罰するぞ。」と役人に言われたらどうでしょう。そんな世の中は息苦しいですね。

実は、憲法に規定されている『人権』とは、普段は空気や水のような存在に感じてしまいがちですが、今のような事例をふまえて、その存在意義をあらためて検討してみると、なくてはならない重要なものだということが理解できるのではないのでしょうか。従って、本講義は、憲法上の『人権』について、歴史的考察や現代的考察を行い、その重要性を再確認してみたいと思います。更に、様々な事例を中心に日本国憲法を検討していくことによって、皆さんが、日本国憲法の知識と考え方を身につけられるようにすることを意図します。■社会学入門 春学期 月曜3限

本講義のねらいは、社会学の基礎知識と理論を学ぶことによって、社会的な思考方法を身につけてもらうところにあります。

前半では、著名な社会学者たちをとり上げながら、具体的な事例をもとにして、社会的行為、社会関係、家族、集団と組織、地域社会などの、社会学の基礎知識をわかりやすく説明していきます。後半では、社会学の巨匠として知られるドイツの社会学者ゲオルク・ジンメル社会学的理論を紹介し、かれの理論をもとにすれば、現代社会のさまざまな局面が解説できることを知ってほしいとおもいます。

■社会学入門 春学期 月曜3限

本講義のねらいは、社会学の基礎知識と理論を学ぶことによって、社会的な思考方法を身につけてもらうところにあります。

前半では、著名な社会学者たちをとり上げながら、具体的な事例をもとにして、社会的行為、社会関係、家族、集団と組織、地域社会などの、社会学の基礎知識をわかりやすく説明していきます。後半では、社会学の巨匠として知られるドイツの社会学者ゲオルク・ジンメル社会学的理論を紹介し、かれの理論をもとにすれば、現代社会のさまざまな局面が解説できることを知ってほしいとおもいます。

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

■宗教社会学 秋学期 月曜3限

社会科学の巨匠として知られるマックス・ウェーバーの宗教社会学的な研究を中心としながら、世界のさまざまな宗教をとりあげ、宗教の経済倫理を明らかにしていきます。

■現代社会と教育 秋学期 木曜1限

教育は、「当たり前」のものが見方が広く流布している分野である。この「当たり前」のこととして広がっている「常識」を疑うのが教育の社会学である。この授業では、社会学的視点と、さらに歴史的視点から教育を見ることによって、教育の「常識」を越えて見えてくるものは何かということについて追究する。

■現代日本文化論 春学期 木曜1限

現代日本文化論の課題は（１）日本社会システムの特徴と（２）日本人の社会行動の理解にあります。特に、グローバル化の影響による日本人の行動の背景にある伝統的文化と価値観の変容を研究します。分析視点としては主に比較文化心理からの議論と解釈を行う予定です。

■比較文化入門 春学期 木曜3限

文化、社会、文化比較、自己理解、他者理解、自文化理解、異・他文化理解

比較文化とは、何と何を比較するのでしょうか？また、比較することにどんな意味と重要性があるのでしょうか？この言葉を聞いて、皆さんがまず頭に浮かべるのは、西洋とアジア、日本とアメリカ、イギリス、中国といったようなイメージでしょう。

確かに文化という概念は、あまりに茫洋としていて、比較対象となる具体的な文化事象はなかなか思い浮かばないでしょう。現在、日本の大学では比較文化の講義が広く開講されていますが、講義の内容は随分とまちまちです。その理由は、この分野の研究が新しい分野でひじょうに学際的（いろいろ学問的アプローチが必要）な領域であり、政治学や経済学あるいは法学のように体系化できていないことによります。

比較文化研究の重要性は、世界がグローバル化（国際化）の中にあり、われわれの無知により、さまざまな人種的、社会的偏見から憎しみや殺人への道（戦争）に進むことから、なんとか共に生きる道（共生）を探ることにあります。この講義では、社会的価値観と社会的システムの文化的在り方の学習を通して、受講生が（１）自分自身の価値観や行動パターンを知り（自己理解）（２）日本の社会や文化の構造を知り（自文化理解）（３）他・異文化への理解を深める（異文化理解）事にあります。受講生が気を付けなければならないのは、異文化は必ずしも外国文化だけに存在するわけではなく、われわれの心の中や日本文化の中にも存在するのです。究極の異文化は、自己自身であるともいえるでしょう。この講義で具体的に扱うテーマは、皆さんの日常生活と密接に関わりのある家族文化、教育文化、文化的価値観などを取り上げ、日本人の社会行動と社会システムが、異文化とどう相違するかについて比較検討を加え、それらの望ましい方向をともに考えます。

■数学 春学期 月曜3限

数およびその計算は算数の初歩であり、大人であれば当たり前のように行えるものである。しかしそのプロセスをマニュアル的に書き出せと言われればうまくできない場合が多い。同様に、その扱っている数そのものは一体何かと問われると答えることはなかなか難しい。

本講義では、数のいろいろな範囲について、その明確な意味を明らかにし、どのように「数」の概念が拡大されてきたかを見るとともに、「無限」というものの扱い方についても考える。

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

特別な知識は必要でないが、数や数式の扱いにある程度慣れている方が望ましい。

■数理科学 秋学期 月曜3限

トポロジー（位相幾何学）は、図形の形状を問題にする学問である。ここでは、図形を曲げたり伸ばしたり縮めたりしても変わらない性質を探究する。

本講義では、イメージしやすい2次元の図形を中心に、ある条件下でどのような図形が考えられるのか、2つの図形が同じかどうかをどう判定するのか、といった問題について考える。与えられた条件を満たすものとしてどのような可能性があるのかを全て網羅することは、一般になかなか難しい作業であるが、いろいろなアイデアによりそれが単純な作業に帰着できたり、意外に簡単な結論が得られたりすることがわかる。

特別な知識は必要ないが、抽象的な思考法に慣れている方が望ましい。

■化学 春学期 月曜3限

本講では化石燃料の大半を海外に依存しているわが国にとって、いかにあるべきかを考える。石油の有効利用として、石油化学製品の原料としても、自動車の燃料としても需要の多い軽質油、すなわち直留ガソリンの品質を高める技術としてのリホーミングのトリプルメリットについて述べる。また、低付加価値性の重質油を高品質の軽質油に変換する技術、クラッキングについて説明する。次に、エネルギー多消費型の素材型化学工業について、われわれの生活と深く関わっている合成繊維、プラスチック、合成ゴムを中心に述べる。一方、省資源・省エネルギー型ファインケミカルでは、素材型化学工業と対比しながら、ファインケミカルの特徴について、医薬品、農薬、染料、香料および中性洗剤の各業種にスポットを当てて述べる。最後に、石油化学工業と深く関わっている環境問題、すなわち大気圏、成層圏、水圏について講義を行う。

■環境科学 春学期 月曜4限

我々は地球の大いなる恵のもとに人類として誕生以来、約400万年が経過した。この歴史の中で、近年めざましく科学が発展したが、人間は太古の時代から環境の影響を受けると同時に、それに積極的に働きかけることによって発達してきた。とりわけ化学工業は、19世紀のイギリスに端を発した産業革命以来、はかり知れない利益をもたらしたけれども、環境にも甚大な影響を与えてきたのも周知の事実である。

「環境の科学」では、物質文明の中で、環境汚染の発生源と自然界へ及ぼす影響について考え、環境汚染を抑制するには、いかに対処していくべきかを模索したい。我が国の公害が表面化して問題とされたのは、1906年（明治39年）に提訴された足尾鉍毒事件が最初のものであろう。近年では、高度経済成長期に有機水銀による水俣病、カドミウムによるイタイイタイ病、大気汚染による四日市および川崎喘息、製紙工場からのヘドロ公害、めっき工場などからの六価クロム汚染、米ぬか油にPCBが混入したカネミ油症事件、あざらし奇形児を出したサリドマイド薬禍、DDT、BHCなど有機塩素系農薬汚染など、公害史に残る悲惨な事件が多発している。

こうした惨事は、廃棄物の不適切な処理や無制限な製品の生産と使用にほとんどが原因している。廃棄物の投棄が自然界へどのような影響を及ぼすか、原料や製品が人体へどのように影響するかという面はなおざりにされ、もっぱら新製品開発による利潤動機の面で動いていたように思われる。そして今、非加熱血液製剤によるエイズ汚染で見えるように、これまでと同じ動機で惨事が繰り返されていることを深刻に受け止めなければならない。

一方、海外ではロンドンおよびロサンゼルススモッグ、石油タンカー座礁による海洋汚染、スリーマイル島やチェルノブイリ原発事故、ごみの焼却によるダイオキシン汚染、フロンなどのハイテク汚染、酸性雨、地球温暖化および放射能汚染など国内と共通する加害と被害が多くあり、環境負荷の程度は局地的なものから地球規模へと拡大している。講義・テーマに沿って授業を進めていく。

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

■地球科学概論 春学期 木曜1限

地球人の活動範囲は著しく広くなり、地球上の至るところへ行くことができ、特殊な訓練をつめば宇宙までへまで行くことができる。その反面、地球の環境は著しく変化している。我々の地球がどのような姿をしているか、また地球環境がどのように変化してきたか認識しようではないか。地球は大きく見て三つの異なった相から構成されている。すなわち、気圏、水圏、岩圏である。固体地球ではこの三つの相があい接し、互いに複雑な作用を行っている。固体地球表面は大気と接する陸と、海洋と接する海洋底からなり、これらはきわだった対立を示している。陸は直接に我々の目にふれるところなので、比較的古くからその実体の解明が進んできたが、海洋底は水の厚い層で覆われているためにその解明が遅れていた。地球科学が発達するにつれ、地球の解明の手段も高度化してきた。最近30年間、地磁気の研究、地震波の研究、地殻熱流量の研究、海洋底地形などが発展するにつれて、新しい地球像が生まれてきた。海嶺で生み出された海洋リソフェアは年間数センチメートルの速さで移動し、これは大陸リソフェアをも動かしている。このことは島弧-海溝変動帯や大陸間変動帯の形成に新しい概念を生み出そうとしている。地球科学の最近の情報を講義したい。

■地球物理学概論 秋学期 木曜1限

1910年頃ドイツの科学者ウエゲナーが海岸線の類似性から大陸移動説を唱えた。この考え方は当時の人たちの賛成を得られず、彼の死亡と共に忘れられてしまった。それは観測技術の未発達な当時としては仕方のないことであった。1950年代に入り、観測技術が発達し、海洋からのデータが得やすくなった。従来、海洋は厚い海水の被覆のため詳細な観測が難しくあまり調査がなされていなかった。特に海洋底のデータは著しく不足していた。その後、重力計、音波測深機、磁力計、エアーガンなどが作られ、陸上よりデータが得やすくなった。海洋調査船が多くの人に作られ、精力的に調査がなされた。その結果、ウエゲナーの大陸移動説が海洋底拡大説として復活した。

私が地質学を学び始めたのは1960年であった。そのころはまだ従来の地質学の知識に基づいて教育がなされていた。しかし、そのころの地球科学の専門雑誌には毎号新しいデータが報告され、それらのデータは今までの知識では説明のできないものであった。不動と考えられていた大陸を移動可能と考え、海洋底は年々生産され、しかも海溝で消滅する。従来説明困難であった事柄が説明できるようになり、地球科学に革命が起きたと感じました。学会も激しい討論の場となり、興奮の日々でした。

観察の学問である地球科学に新しいデータが加わると学問体系も変化してしまいました。今や、地球の誕生から現在まで地球に生じた変化を読みとれる時代になってきました。私が受けた考え方の変化の興奮を語る事ができたらと思っています。

■生物学 春学期 月曜3限

生命の仕組みを知れば社会組織にも活用できることが多い。酵素の性質や免疫力を知れば、病気を予防する知恵にもなります。花はどういうときに咲くのか、植物が二酸化炭素を吸収するのは何のためなのか、組織の健全性を保つ仕組みや社会生活を営む上で必要な生物学を考えます。

■生態学 春学期 木曜2限

■文化人類学 秋学期 水曜1限

この講義では、現代社会で起きているさまざまな問題を、同時代人として理解することを目指す。人類は、自然社会、農業社会を経て、17世紀以来産業社会の時代に入りました。現在は産業による生産がもっとも充実し、先進国においては多くの人々が豊かさを享受した。しかし、実はこの先

※ 内容が変更になる場合がございます。
※ 開講曜日・時限が変更になる場合がございます。

進国の住人は世界の人口の1割を満たすにすぎない。地球上の大多数の人々が貧困や飢餓に苦しんでいるというのが真実である。また、現在は、先進国と途上国の区別を越えた、地球規模の問題として、温暖化、オゾン層の破壊、大気汚染、環境ホルモンなどの環境問題が深刻化している。さらに、食糧自給率が3割しかない日本においては、食糧問題も潜在的な脅威である。

この講義では、ゴミ問題、化学物質アレルギーなどの身近なトピックを取り上げ、現代の日本社会の問題を提起したい。また、日本の問題は、環境、貿易、情報などによって必ず地球規模での問題に行き着く。地球人として、どのように生きるべきかを、自然と人間の共存や人類社会の成基盤について考えることから掘り起こしていきたい。

文化人類学は、我々とは異なるロジックにしたがって生きている「他者」を理解することを通じて、我々自身についてよりよく知ることを目指している。異なる文化を理解しようとするとき、我々は、この日本文化によって形づくられた自分自身の姿を振り返らざるをえない。

個としての人間と、集団としての人類社会の全体を想定するならば、その両者の間に民族が存在し、文化が存在し、また世界全体を覆うようなシステムが存在している。人間社会の行動パターン、自然資源の利用、食文化、言語、宗教、民族といった概念を明らかにし、どのように、世界を認識し、文化を理解するかを解いていく。